

詠 詠 句 誌

五 月 号



花鳥諷詠

5月号 (446号)

日本伝統俳句協会

花鳥諷詠[®]

令和7年5月 ■ 第446号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	山田 佳乃 2
	荒木かづを 4
この人の作品	勝村 博 7
一頁の鑑賞	大橋 一弘 8
	池末 朱実 9
卯浪	10
虚子研究 『六百五十句』 研究 (63)	11
句集『高天』 三村純也	
静かなる驚き	阪西 敦子 18
虚子生誕一五〇周年記念オンライン講座	
「なぜ虚子は花鳥諷詠と言い出したのか？」 視聴記	
.....	安田 豆作 21
支部だより (中国支部)	
全国俳句大会【岡山】	名木田純子 23
新刊紹介	25
質問箱	26
風報	28
<hr/>	
地区行事開催日程表	31
編集後記	32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙 川端龍子「桑港」(「ホトトギス」大正2年7月号)

花鳥諷詠選集

山田佳乃選

特選五句

鳩潜る笑窪のやうな波残し

大牟田 介弘 紀子

開け閉ての襖のきしむ屋根の雪

天童 村形 嵩子

がらんどうの幹より瑞枝梅の花

高松 豊島 禮子

人日や言の葉選びつつ見舞ふ

今治 比留木 のぶ子

松原に松の数だけある雪間

福岡 野口 明子

二句短評

一句目——冬の水辺で鳩が次々と潜っては現れる。潜った水面が少し凹んでいる様が笑窪のようだと表現された。その笑窪という比喩が可愛らしく心惹かれる。
二句目——今年は大変な雪が降り、日々の雪掻きや雪降ろしに追われる日々だったのだらう。屋根の雪の重みで歪みが生じている様子。雪の圧が感じられリアリティがある。

入選六十句

立春の海を聞きある耳となる 仙台 赤間 学

雪礫投げ合ひ下校進まざる 小千谷 大矢あきこ

遠まはりしても神域梅探る 羽生 塩田 章子

幾重にも野火の烟りて明日は雨 東京 黒島 流世

島人の手折りてくれし水仙花 熊本 今福 公明

耕の手始めといふ広さかな 半田 稲葉 京閑

あたたかき日差引きよせ六地藏 福山 世良 正子

待ち兼ねてときめきて摘む露の臺 加賀 出島 達子

悴みし口に言葉の躓きぬ 浜田 福本 正嚴

緑濃き院内食のなづな粥 大牟田 介弘 浩司

何もかも包みなほして春の雪 札幌 押野 美江

冬桜咲き始めとも終りとも 高松 久本 照代

飾焚く燻り出されし縁起物 高松 池田 裕子

絵双六子の遊びにも運不運 上越 橋詰シズエ

熱爛にいつもの君でなくなりし 高山 原田 尚子

飼主の愛なんのそのうかれ猫 洲本 高野 さち
 嬰兒の泣き声といふ初電話 神戸 中井 陽子
 大寒やひと塊の阿蘇五岳 荒尾 大川内みのる
 初場所の初大銀杏勝名乗 金沢 中野 幸枝
 浦人の深き信仰春の雪 高崎 吉井たくみ
 櫓加速上半身は置き去りに 東京 荒井 桂子
 遊具みな深き眠りに冬銀河 神戸 塩見 成子
 山茱萸の黄を解く力もどかしく 東京 小島由美子
 風花に風の旋律ありにけり 高島 貫野 浩
 山の湯の一灯潤む余寒かな 大阪 徳永由起子
 生き生きと濁り出したる春の水 藤岡 飯塚 柚花
 薄氷の鱗よりもるる草の息 福岡 大石 千鶴
 浪の花舞ふ日の能登は昼灯す 福岡 島原 仁代
 雨音は春の扉を叩く音 佐賀 古庄たみ子
 猿曳の声鞭となり飴となり 神戸 岩水ひとみ

春しぐれ醬の町の深庇 金沢 松田とも子
 どか雪にしがみつかれて重き屋根 北海道 安田 豆作
 声張るは気持ちよきかな豆を撒く 小樽 遠藤 嶺子
 円墳に始まりの色下萌ゆる 岩倉 村瀬みさを
 日脚伸ぶ二十四時間自由の身 神戸 森岡喜恵子
 海苔粗朶を遠巻きにして作業船 高松 佐保美千子
 寒紅をさして憂ひの無き如く 大牟田 山下 順子
 旅終へし母と語らふ四温かな 鹿児島 手打 桃果
 震災に負けぬ三代若布刈舟 大阪 酒井 湧水
 西陣の誇りを今に針供養 西宮 山之口倫子
 汀子忌の近きを知らず梅だより 浜田 小池ミサエ
 早春や芽生えといふは心にも 神戸 明石 裕子
 風花の水面の青に触れぬまま 広島 山根 正巳
 米作る準備大雪山雪解 北見 藤瀬 正美
 凍解の吉備の山山むらさきに 岡山 山口喜代子

凍解の長靴重き畑仕事 伊賀 西澤与志子
 消ゆるとは光ることなり春の霜 立川 日置 正樹
 早春の波柔らかくなる途中 春日部 吉川あかし
 一つづつ仕上げ手彫りの年賀状 西予 黒田 美穂
 マッチ擦る朝な夕なや春寒し 福岡 伊木田真理子
 深雪晴橋の奥にも橋の見え 青森 七戸富美子
 奥畑へ轍のゆるび寒明くる 神戸 小柴 智子
 耳許に玻璃打つ音や雪女郎 鳥取 宮脇 典子
 おとうとに分のあるバレンタインデー 神戸 涌羅 由美
 碑にひとすぢの朱藪椿 東京 飯島 千青
 眺望の城下無数の雪の屋根 金沢 宮村 啓子
 蠟梅の水滴透ける花卉かな 川崎 高原 沙織
 添文を又読むバレンタインデー 筑紫野 馬場三知子
 雪うさぎ赤き目残し逃げ去りぬ 福岡 森 順子
 ほどほどに酔ひつ水下魚をほぐしつ 東京 青園 直美

● 荒木かづを選

特選五句

一面に楽譜を広げ春炬燵

高松塩田 八寿子

スケートに一筆描きのドラマかな

島原 八木花栗

崩壊の窓岩に舞ふ浪の花

石川宮下 末子

揺れながら街を立ち上げ蜃気楼

小樽 伊藤 玉枝

熱爛にいつもの君でなくなりし

高山原 田尚子

二句短評

一句目——春炬燵に入って一面に広げた楽譜に見入っている。オーケストラの譜面か、あるいはジャズギターの譜面かなど、いろいろと楽しい音楽が聞こえてきそうな一句。

二句目——フィギュアスケートは、水上に図形^{II}フィギュアを描いて、その軌跡と表現の美を競う。わずか三〜四分間の演技に、後戻りできない一筆描きのドラマがある。

入選六十句

凍星や亡き子に写経三十年 神戸 宮田マスヨ
 聖母子のかんばせ模糊と踏絵板 高山 大下 雅子
 最後迄命守りし懐炉かな 高知 森脇 杏花
 ふくらめる木の芽いたはりみくじ結ふ 天理 松田 吉上
 何もかも包みなほして春の雪 札幌 押野 美江
 天上の夫と眺むる春の雪 諫早 安原さえこ
 汀子師の在さぬ芦屋や水涸るる 神戸 柏原 憲治
 日向ぼこ母の子宮に眠るごと 神戸 片岡 橙更
 悴みてわが脳漿もこちこちに 鳥栖 西山 恵二
 山焼の跡鎮めゆく雨匂ふ 鳥取 砂流 育子
 鳩潜る笑窪のやうな波残し 大牟田 介弘 紀子
 風花に風の旋律ありにけり 高島 貫野 浩
 入魂のラグビーボール蹴り上がる 西予 三瀬 教世
 昨夜の風閉ぢ込めてをり薄氷 松山 渡部美恵子
 浪の花舞ふ日の能登は昼灯す 福岡 島原 仁代

軀にも遊び心や雪うさぎ 高松 高橋 遥
 探梅や籠りに慣れし心解く 白山 鈴木 恵子
 決意とは密かなるもの初鏡 福岡 大石 靖子
 句心を携へきたる春の人 西宮 本郷 桂子
 この村に終ふる生涯麦を踏む 香川 三宅久美子
 アンソロジー開けば春の足音す 草津 田中 幸湖
 笹鳴や生きろ生きろといふエール 井原 鈴木 千恵
 野を焼きて一村軽くなりけり 加古川 岩城 久美
 話し好き俳句好きとの春の旅 太宰府 福永 恵美
 春めくや和菓子いろいろじゃんけんぽん 那珂川 池田ひさ絵
 春風やふと一人旅してみた 長岡 佐藤 文子
 寒紅をととのへなほす棺窓 四日市 伊藤 和子
 大鷲のまなこは北へ国後へ 長岡 安井 里子
 震災に負けぬ三代若布刈舟 大阪 酒井 湧水
 軒並に若布干しある能登荒磯 金沢 岸本佐紀子

師を偲ぶ句座となりしや梅二月 高松 島谷うた子
 クリオネに焦がれ砕水船に乗る 郡山 佐々木君江
 西陣の誇りを今に針供養 西宮 山之口倫子
 細魚捕りして登校の島の子等 七尾 宮田也寸子
 手術着の肌に刺さるや春浅し 根室 前田 水絵
 末黒野にくすぶり生きてゐる命 金沢 村上 秀吾
 姿よき形となりて山眠る 岡崎 新家 正美
 大雪の里をなぐさむ月明り 七尾 谷口由美子
 決断のつかぬ一事や梅に佇つ 久留米 矢野 愛子
 遠山に余白の美あり残る雪 福岡 中野 弘子
 露の臺山土の香も持ち帰る 香川 宮脇 頼子
 くノ一がゐさうな湯船月朧 神戸 石田 裕美
 空想の膨らむ古墳春隣 松原 吉村美穂子
 寒明くる同期会出席に丸 柏原 鈴木 輝子
 梅林の勾配梅を傾かす 福岡 塚田 由美

凍解けて土竜擡ぐる山二つ 武蔵村山 福留 和江
 声だけで続く友あり初電話 鹿児島 岡村らみ子
 風花の舞ふ川幅の広さかな 高松 永森ケイ子
 合格に景色変はりて春の雪 佐賀 山田 香織
 夫になき歳月生きて冬の月 鹿児島 柳橋かすみ
 白梅や後ろめたさが疼き出す 高松 郡 としゑ
 春浅し地震禍の心まだ癒えず 七尾 松本 慶子
 風もまた軽くなりたり若布干す 神戸 影山 里風
 後ろ手に結ぶエプロン春の朝 熊本 西村 孝子
 観音の千手のごとく楓の芽 高松 信里由美子
 受話器より早春の声弾み来る 摂津 小西 真子
 汀子忌や笑顔の写真懐かしく 阿南 かつせ千津
 村百戸決めごとひとつ春時雨 伊賀 居附 秀峰
 師の逝きて取り残されし二月の野 由布 立川さよ子
 添文を又読むバレンタインデー 筑紫野 馬場三知子



編集後記

旅するは薄暑の頃をよしとする

虚子

松山で生まれ育ち、鎌倉に住んだ虚子は、やはり温暖な地がよかったようだ。「は」とか「とは」を上五に持つてくる時は注意を要する。もったいぶった言い方に聞こえて、こういう文体を嫌う人がいる。この句は、旅そのものでなく、旅の準備の折の、あるいはその計画を顧みての句だから、これでいい。旅はその準備を立てる時から始まっている、という心の持ち様は、芭蕉も書き残していることだ。

●総会の出欠葉書がそろそろ届くかと思えます。期限までに出欠をお知らせください。欠席の場合は、委任状に必ずご記載ください。

●総会会場周辺の吟行地をご案内いたします。例えば、地下鉄桜田門駅（出口3）を出てすぐ目の前に位置する、桜田門です。目前に広がる御濠は皇居周辺では最大の規模です。

●会場の法曹会館は、昭和初期における名建築のひとつとされています。戦災をまぬがれた館内の内装には、イタリア産の大理石やタイル張りなど、竣工時のものが数多く残されており、戦前丸之内近辺で虚子が句会を行った雰囲気を感じられます。レストラン・マロニエは、谷崎潤一郎の「細雪」にも登場する、日本の西洋料理の草分け「二葉亭」の流れを汲むものです。

●九月の全国大会の会場となる岡山か

ら地区だよりをお寄せ頂きました。募集句も蘭です。選者の多さは選の間口と奥行きを示すものです。ご投句をお待ちしております。参加申込書にもありますが、ホテルは各自でお申し込みをお願いします。

（井上泰至）

花鳥諷詠五月号（通巻第四四六号）

定価一、二〇〇円 但し、本代は年会費を含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和七年五月一日

発行人 岩 岡 中 正

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八九

シヤンプル笹塚二一B一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム㈱

〒112 0014 東京都文京区関口一一九二